Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

P 70

園舎・園庭の改善を通しての保育実践の変容（III）

—研究者と保育者によるアクションリサーチの試み—

○ 福田秀子（山脇学園短期大学）　無藤隆（お茶の水女子大学）　向山陽子（駒場幼稚園）

I はじめに

幼児期の子どもは日常生活の中で、身体活動を通して様々なことを理解し、身につけることにより発達してゆく。従って子どもの生活の場である幼稚園にも、子供の自然な動きや遊びを促すような環境が求められる。K幼稚園では、95年秋以降子どもの自主性を重んじた自由感のある保育を目指して、古い閉塞的構造の園舎を開放的な構造へと少しずつ改善してきた。98年春からは研究者による観察が開始され、子どもの遊びと発達を促す園環境作りに向けた研究者と保育者の協力によるアクションリサーチを続けている[1)2)]。本研究では、外階段と園庭部分について、改善前と後の時期における子供の活動の様子を比較し、園環境の変化と子どもの動きとの関わりについて考察する。

II 方法

対象：K幼稚園児102、保育者10、事務専任1、(98,4現在)、による保育の様子と保育の場としての園舎・園庭・屋上。

方法：①保育中の園内で、子どもたちがどのような場所でどのような活動をしているかを観察・記録し、補助として写真撮影する。保育終了後に保育者たちから状況説明やエピソード等の情報を得、観察記録（98.4—01.12）を作成する。②園長の保育記録と改善記録（95.10—01.12）と園長へのインタビュー、③①②とその他資料をもとに考察する。

III 結果と考察

1. 外階段部分

現在の年長児は外階段新設時（99.9）に年少であった。はじめのうち足元を見ながら慎重に上下していたが、今では急ぐときにはかなりの速度で上下し、ゆっくり会話したり眺めたり、この場所に慣れてきた様子がみえる。年中児の行動も時間の経過とともにスムーズになっている。外階段の上と園庭では、新設直後から声をかけあう姿が見られたが、しばらくして階段の中間点にいる子どもが近くのジャングルの上にいる子どもと会話するようになった。らせん状の階段の上下垂直に糸電話を垂らして話をする子どももいるが、この場所の特徴を生かした遊びは少ない。さらに使いこなされれば新しい遊びが生まれるのではないかと期待される。

2. 園庭

園庭は植栽と遊具の新設を主に改善が進められてきた。年々緑が増え、季節の変化がよりはっきり見えるようになり、虫や植物の採集も盛んになっている。遊具は、比較的長時間遊ぶ砂場、すべり台等と、短時間ですむ鉄棒、タイヤブランコなどが古木、切り株で連続した形に配置された。

外階段新設により、2階保育室と庭が直結して以来、外遊びが急増した。園庭の回遊遊びは98年度では追いかけっこの時以外、少なかったが、徐々に増加して01年には頻繁になった。長時間おしゃべりしながら、ゆっくり遊具や拠点を渡り歩くグループもあり、すいている時には、年少児もうれしそうに回遊遊びをしている。年長児と保育者のドロケイ遊びはグラウンド、スロープの他、ぬけ道、遊具、隠れ場所など、ほとんど園庭のすべてを使用して長時間展開している。

園庭には、本来通路ではない場所を子どもがくり返し通って、道になった箇所がいくつもある。以降、これを「子ども道」とよぶ。スロープに沿った植え込みの途中を00年秋頃から時々子どもが通り抜けていたが、01年度に入り、通行が増えた。子どもは、緑がのび花が咲く季節にはあまり通らず、秋になって葉が落ちすき間が目立つようになると、また往来が増え、子ども道らしくなった。季節の変化の他にも保育者の意識が「そこは入らないところ」から、「ここを通っているのね」という半公認に変わったことも子ども道の成立にかかわっていると考えられる。以前はこの植え込みがまばらで、通り抜けも楽であった。その時期ではなく、01年になってから子ども道が成立したのは子どもの回遊遊びが活発化して園庭が使いこなされてきた結果、遊びに便利な道が生まれたためと思われる。

木登りかえでの並びの、小高い場所には以前から子ども道が2本あり1本は夏の草でほとんど見えなくなる。01年10月植木屋が入り小枝や下草を払った直後、その場所に年長児と保育者の協力で小枝と立ち木を紐で結んだ「基地」ができた。はじめは木の葉で囲まれて基地の中は見えず、隠れ家のようだったが、次第に葉が落ちて小枝だけが残り、丸見え状態になった。しかし、「基地」の中にはゴザ、イス、テーブル、ブロック石、バケツなど次々に運び込まれ、熱心にままご

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

とをしたり、外出したり、遊びが展開している。年長不在の時には年中が入り込んだり、通り抜けたりする。

同時期に、正門横の藤棚の下にも保育者が小枝と棒をつかった斜め屋根の小屋を作った。ここも葉が落ちて丸見えになったが、イスやテーブルが入り、地面には落葉が敷かれて、年少・中・長児が出入りしている。イスに座って外を眺めたり、ままごとをしたりの他に、トンネルのようにくぐり抜ける子もいる。小屋と植え込みの間の隙間にも、子ども道ができかけている。

園庭遊びが一段と活性化した原因の1つとして、屋上が本格的に第二の園庭の役割をはたすようになったことがあげられる。庭と屋上の使用時間は朝の保育者の打ち合わせで決められ、屋上へ誘導して遊んだり、お弁当を食べたりする回数が増えた。園児数は98年に比べ約60人増え、外遊びも増加しているにもかかわらず、園庭が混雑せず遊びが活性化しているのは外遊びが屋上と園庭に上手に分散された効果も大きいと思われる。

最近の園庭では、隅々まで子ども道ができ、いろいろな遊びが活発に展開している。95年秋から続けられてきた改善と保育の工夫効果が子どもの遊びに現れてきた。無藤が提示した子どもの動きやすい環境[3]作りは順調に進んでいると言えよう。

IV まとめ

園舎・園庭改善の前と後では、子どもの活動に変化がみられ、変化を促す要因としては、次の(1)から(4)が考えられる。

(1) 保育者側が行う物的環境の変化

園庭では植栽により自然が豊かになり、採集その他の遊びが増えた。また、遊具配置の工夫により、流れが生じ、遊びが活発化した。

ミニ階段の設置で園舎内に回遊性が生じ、回遊遊びが生まれた。外階段の設置で外遊びが増加した。さらに通行量の分散によりスロープやミニ階段の特徴を生かした遊びや年少児の使用が増えた[1]。

(2) 四季による自然の変化

特に園庭と屋上で四季の変化がはっきり見え、子どもはその季節ならではの遊び方をする。こどもの動線は季節により大きく変わる。

(3) 保育者の意識、方向付け、誘導、行動

自然への気づき、新しい場所や遊びへの誘導、園内の隅々まで生かした使い方をしたいという意識、新しい子ども道の容認、魅力的な日常の小イベント、保育の工夫は子どもの活動変化の大きな要因となる。

(4) 子どもが能動的に変える環境

新しい遊び場の発見、開発、子ども道などは子どもが同じ場所で繰り返し遊んだり、使用して使いこなされた状態になってはじめて現れることが多い。01年にはおたまじゃくしを飼いたいこどもが園長に働きかけ、皆で池作りをした。子どもの発案に保育者が協力して環境を変える動きが出てきた。

多くの場合、園内をよく使いこなし、発達もすすんだ年長児が開発し、年中、年少児はそれを見ていて、年長がいない時に覗いたり試したりする。遊びの伝承による子どもの行動変化もある。

(1)～(4)は複雑に絡みあい、子どもの動きの変化に作用すると考えられる。

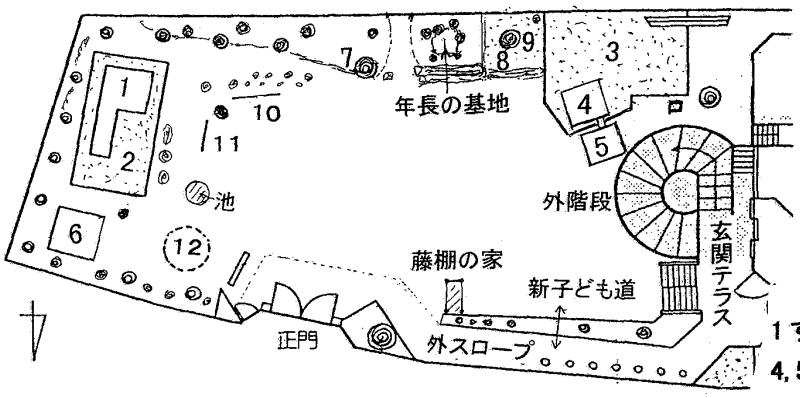
本研究では、園環境が変化すると子どもの動きが変わり、逆に子どもが園環境を変えてゆく例も観察した。子どもの動線を考慮した園環境作りの重要性が再認識された。

参考文献

1)福田秀子、無藤隆、向山陽子、園舎の改善と保育実践の変容 I－研究者と保育者によるアクションリサーチのこころみ－保育学研究、38-2, 87-94, 2000

2)福田秀子、園環境と保育、無藤隆編、幼児の心理と保育、43-60 ミネルヴァ書房、2001

3)無藤隆、トポスにおける発達(1)、幼児の教育、94-4, 24-31, 1995



1 すべり台　2, 3 砂場
4, 5, 6 ジャングルジム　7, 8 タイヤブランコ
9 木登りかえで　10, 11 鉄棒　12 土の山

図 園庭と外階段の配置

NII-Electronic Library Service